

森山小学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

- ①聴き合い、伝え合う力を伸ばす授業の充実
- ②学力向上の基盤となる学習規律・家庭学習習慣の確立

校長

久保 尚史

学力向上推進員

寺澤美智代

【各校の取組状況の把握について】

研究授業の事前研修や研究授業、学力向上研修における教員からの報告等、様々な機会を捉え取組み状況の把握を行う

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○言語や計算等の課題に真面目に取り組む、基礎的、基本的な知識・技能の定着が図られている。 ●基礎的・基本的内容が多くなるにしたがって、学力の二極化傾向が見られる。語彙力にも課題が見られる。自らの学習状況について児童自身が課題意識を持って取り組むことができにくい。	・相手意識、目的意識を持って「話すこと・聞くこと」ができる。 ・基礎学習に集中して取り組み、言語や計算の基礎的、基本的な知識・技能を確実に身につけることができる。 ・日常生活に必要な語彙を習得し、適切に使うことができる。	・「話し方名人・聞き方名人」の取り組みを継続し、全校体制で実践・発表の機会を持ち、学習の土台である「話す聞く」力を培う。 ・スモールステップのぐんぐんテストやタブレット端末を活用したドリル学習を行う。 ・読書や新聞を読むことを通して、語彙力の向上を図る。	・筆順や音・訓読みのみならず、辞書を活用した熟語調べ、短文作り等の丁寧な漢字指導の継続を図る。 ・四則計算では、手順だけの習得にならないように、具体物や図で表し概念理解を深める。 ・ぐんぐんテストではスモールステップの小テストを実施し、知識技能の確かな定着を図るとともに、できた喜びを実感させ自己肯定感を高める。	・「話し方名人・聞き方名人」の全校体制での取り組みの成果が、次第に現れてきた。 ・スモールステップのぐんぐんテストや日々の小テスト、算数科での線分図・表等を取り入れた計算、及び基礎・基本の事柄の読み上げ等により、概ね基礎的な力の定着が見られる。しかし、達成状況の二極化が生じている学年もある。 ・読書・新聞活用で語彙力向上を図る取り組みは、学年が進むにつれて時間的に設定が難しく、十分に実施できなかった。	・引き続き「話し方名人・聞き方名人」の全校体制での取組を継続し、「話す・聞く」力の一層の向上を図る。 ・個に応じた基礎学力の底上げを図るため、ぐんぐんテストに前学年の問題を取り入れたり、タブレット端末を活用したドリル学習の頻度を高めたりする。また、四則計算にも、線分図や図を用いて概念理解を図り、手順を説明させる。 ・読書日記や新聞活用を週末課題等に組み入れたり、詩の暗唱や視写に親しませたりしながら語彙力の向上を図る。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○スピーチ力が高まり、自分の考えを話そうとする児童や友達の考えをしっかりと聞こうとする児童が増えている。 ●他者の意見を聞き、自分の考えに反映したり反論したりできる児童が少ない。 ●課題解決に向けて、必要な情報や知識・技能を選択し活用する力やじっくりと思考・判断し、自分の考えを分かりやすく表現する力は、十分には育っていない。	・互いに考えを伝え合う活動を通して、友達の考えにつなげて、自らの考えを発表することができる。 ・目的や意図に応じて必要な情報を取捨選択し、他者と伝えあうことを通して、よりよい解決法を考えることができる。	・ペア学習やグループ学習の機会を効果的に設定するとともに、話し合いの観点を明確にしたり手引きやモデルを提示したりし、話し合い活動の充実を図る。 ・「なぜ・どうして」との問い返し学習を進め、対話的な学びのおもしろさを実感させる。 ・児童が必要な情報を取り出し、整理する活動の中で、比較・分類・関連付け等、様々な思考に取り組めるよう発問や指示を工夫する。	・条件つけて自分の考えを書く場面を増やしたり『学習ガイド』を活用したりし、目的に応じて必要な情報を抜粋し表現の効果を考えながら書く力を高める。 ・児童が自分で問題を発見し既習内容を振り替えられるように場の設定や発問を工夫する。 ・「なぜ」「どうして」といった問いかけを重視し、ペアやグループで意味や根拠を考え説明する場を設け、学問的な見方や考え方をつなぎ顕在化させる。	・考えを伝えあう活動では、「話し方の手引き」を参考に、友達の考えにつなげて話すことができる児童が増えてきたが、考えの相違点に気づいたり問い返したりするまでには至っていない。 ・「なぜ」「どうして」といった問いかけを重視した授業展開は、教師が中心になってすすめたり、単元を絞り込んでグループやペア学習で実施したりした。 ・「書く」活動は、ひな型や観点を明示すると自力でまとめることができるようになった。	・グループ学習の話し合い活動では、「話し合いの手引」を活用し、理由・根拠を明らかにしながら考えを伝え合う活動を充実させ、個々の話し合いの力を高める。 ・理科学習においては、「導入→仮説→実験→考察」等の学習の仕方をパターン化し、探求学習ができる授業改善に努める。 ・「なぜ・どうして」との問い返し学習を教師主体から押し進め、対話的な学びのおもしろさを実感させる。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○与えられた課題にはまじめに取り組むことができる割合が高い。 ●家庭学習における丁寧さや苦手な課題への取り組み姿勢が低い。 ●自分でめあてを立てて学習に取り組むことや読書の習慣化に課題がある。	・苦手な事や難しい課題に対しても、粘り強く丁寧に取り組むことができる。 ・自分でめあてを立て、主体的に学習や読書に取り組むことができる。	・「家庭学習の手引き」「自主学習の進め方」をもとにモデルを例示しめあてをもたせる。 ・外部図書館との連携や読み聞かせ、週1回の読書時間の確保や週末読書の推奨など読書活動を工夫し、読書環境を整える。 ・ポジティブな行動支援に基づき、児童の頑張ったことやできるようになったことを可視化し、伸ばしていく。	・外部図書館との連携を一層図り、学習状況に応じた図書や児童の興味関心の高い図書をそろえ、より魅力的な読書環境づくりに努める。 ・週1回の読書時間を確保するとともに、手元に本を置き、隙間時間の読書や週末読書の推奨を図る。1分間スピーチに読書紹介を取り入れる。 ・復習等にタブレットを活用した個別最適な学びを随時行い、主体的に学習に取り組む姿勢を培う。	・課題提出は、一貫性のある指導により課題率は高まり、家庭学習の確立が図られてきたが、丁寧に取り組むことや難しい課題に粘り強く取り組む姿勢には、学年によってばらつきが見られる。 ・自主学習は、めあてを持って取り組んでいる児童が、増えてきた。 ・学年が進むにつれて読書の時間が確保しにくい。週1回の読書タイムだけでは、読書の習慣化には至らなかった。	・丁寧に課題に取り組んでいる児童には、スタンプやシールを貼る等、頑張りや可視化に努め、確かな家庭学習の習慣化を図る。 ・自主学習のモデルを提示したり、自主学習の参考となる図書や新聞を教室に常備し、主体的な学習に取り組める環境づくりに努める。 ・受け身的なタブレット活用ではなく、ミライシードでめあてを決めるなど主体的なタブレット活用を推進する。